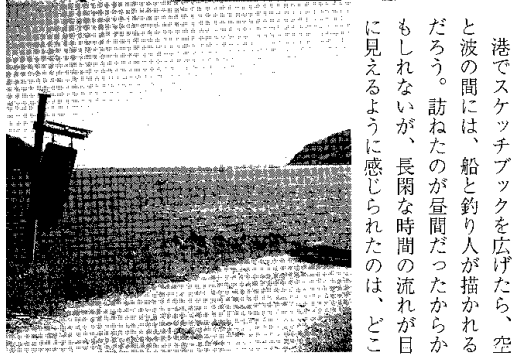




上/大浦港。この西側は大浦園地として整備されている  
下/昭和30年代まで渡し舟が着いた「舵ケの渡し」の乗降場



と波の間には、船と釣り人が描かれるだろう。訪ねたのが昼間だったからかもしれないが、長閑な時間の流れが目に残るように感じられたのは、どこ

丸子船の里をうたっている大浦には、数年前「北淡海・丸子船の館」がオープンした。そこに展示されている明治中期の大

余り、月初めの日曜日はみんなで掃除しますんや。ここ十年ほど前からやな、こんなに来やーるようになったのは…

「このごろ釣りの人がようけ来て、休みの日なんか、動けんほどの車や。ゴミを放っていく人も多し。公衆トイレの掃除は、地元のものも当番制でや

普浦の成り立ちは、平安時代以前、ここに隠れ住まれた淳仁天皇に従って来た賢人の集団が住み着き、漁労と舟運に従事したという説がある。賢人

場が、赤崎丸子舟パークキングのすぐそばに残っている。

浦港の復元模型を見ると、現在の港の周囲にも、いくつもの舟着場があったことがわかる。  
大浦から葛籠尾崎に近い普浦までの湖畔の道沿いにもたくさんさんの車と釣り人。山がすぐ後ろに迫り、湖岸にひしめくように家が並ぶ普浦は、長く陸の孤島といわれ、離れた地にある田や畑へ行くのも舟を使っていた。また、「舵ケの渡し」が人びとを大浦の近くまで運んだ。鐘を叩いて舟を呼び、陸路を行けば二・五キロの入江を三分の一の距離で行った。明治三十年から昭和三十四年までの六十余年、学校へ通う子どもたちも乗り降りした大浦側の渡し場が、赤崎丸子舟パークキングのすぐそばに残っている。

へ行っても、じつと釣り糸を垂れる人影が多かったからだ。  
湖北では一番西に位置する大浦港は、十数艘の船が繋がれているものの、港につづく湖岸の帯は大浦園地として整備され、中京方面からの釣りの姿が目につく。近江うみの辺の道と名付けられた湖岸の道をやってきた三人のおばあさんが、木陰で一休み。

「この辺は、あの山の際まで湖やったのを埋め立てしたんや。もう二十二年の余になるかな。舟着場が家々にあって、わたしも自分で舟をこいで向こう側まで行ったもんや。柴刈りやら畑やらしいに。舟は、ヒラタケ言うて、一人で槽を漕いで行ったわ」と、立った姿勢で一本の槽を漕ぐしぐさ。

「このごろ釣りの人がようけ来て、休みの日なんか、動けんほどの車や。ゴミを放っていく人も多し。公衆トイレの掃除は、地元のものも当番制でや

余り、月初めの日曜日はみんなで掃除しますんや。ここ十年ほど前からやな、こんなに来やーるようになったのは…

丸子船の里をうたっている大浦には、数年前「北淡海・丸子船の館」がオープンした。そこに展示されている明治中期の大

余り、月初めの日曜日はみんなで掃除しますんや。ここ十年ほど前からやな、こんなに来やーるようになったのは…

丸子船の里をうたっている大浦には、数年前「北淡海・丸子船の館」がオープンした。そこに展示されている明治中期の大

余り、月初めの日曜日はみんなで掃除しますんや。ここ十年ほど前からやな、こんなに来やーるようになったのは…

丸子船の里をうたっている大浦には、数年前「北淡海・丸子船の館」がオープンした。そこに展示されている明治中期の大

余り、月初めの日曜日はみんなで掃除しますんや。ここ十年ほど前からやな、こんなに来やーるようになったのは…

丸子船の里をうたっている大浦には、数年前「北淡海・丸子船の館」がオープンした。そこに展示されている明治中期の大

余り、月初めの日曜日はみんなで掃除しますんや。ここ十年ほど前からやな、こんなに来やーるようになったのは…

丸子船の里をうたっている大浦には、数年前「北淡海・丸子船の館」がオープンした。そこに展示されている明治中期の大

余り、月初めの日曜日はみんなで掃除しますんや。ここ十年ほど前からやな、こんなに来やーるようになったのは…

丸子船の里をうたっている大浦には、数年前「北淡海・丸子船の館」がオープンした。そこに展示されている明治中期の大

余り、月初めの日曜日はみんなで掃除しますんや。ここ十年ほど前からやな、こんなに来やーるようになったのは…

湖北 冬の名物  
**鴨すき**  
食べて泊って…¥9,800  
宴会予約受付中  
国民宿舎 **つづらお荘**  
伊香郡西浅井町普浦580番地  
TEL: (0749) 89-0350  
FAX: (0749) 89-1363  
●客室17 (80名) ●大広間 (20名) ●浴室2 ●食堂

# びわ湖へ

## びわ湖への入り口

私たちにとってびわ湖は、ふるさとのシンボルであると同時に、レジャーフィールドであり、食材の宝庫でもあり、まさに母なる豊かさをもつ存在だ。電車や車がなかった時代は、湖上を船で渡るのも日常的な移動方法の一つだった。ただ湖は往々にして自然の力に支配されるから、人びとは今よりずっと多くの謙虚さを持ち合わせていたが、時代を経ることにびわ湖との関わり方は一方的になり、何でも許容してくれる母の痛みに気づかないことが多くなってきた。近年のびわ湖は、環境や自然の指針をみるバロメーターにもなっている。

今回のテーマは「港」だ。とはいっても、びわ湖の港と聞いて、神戸や横浜の埠頭のような光景を思い浮かべる人はいないだろう。びわ湖に面する港の多くは、船着場、舟だまりといった様相にちかい。湖と内陸との接点、湖と人がつながる場として港をとらえ、その風景を追ってみたい。

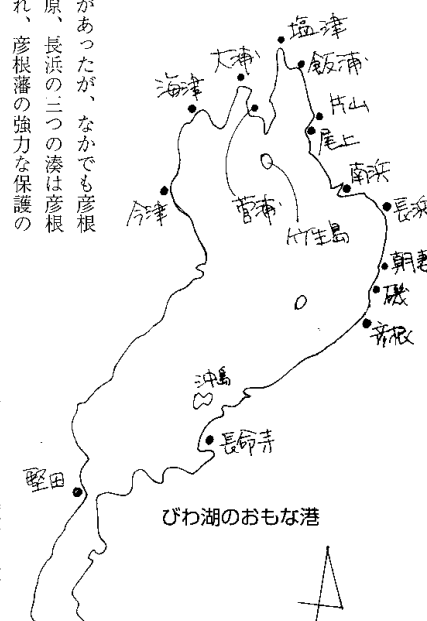
京都、大阪方面への物資輸送に貢献していたわけだ。江戸時代、びわ湖には四十八浦(小さなものも含めると百餘りの港)があったが、なかでも彦根の松原、米原、長浜の三つの湊は彦根三湊と呼ばれ、彦根藩の強力な保護のもとにあった。江戸時代初期は軍事的性格が強かったが、その後次第に物資輸送を主体にした経済的な性格をもつようになっていく。

そのころ活躍した船は丸子船と呼ばれるもので、船の胴体に、オモギと呼ばれる丸木を半分に割ったような木材が取り付けられているのが特徴だ。大きなものは五百石積から、近所の港回りに使用された小型の七石船までいろいろな大きさがあったようだが、多かったのは百石積だった。慶安二年(一六四九)には、びわ湖の船一八四五艘中二千七艘、延宝五年(一六七七)には、二九七七艘中一一七七艘が丸子船だったという資料が残っている。ほかに、団平(だんべい)船(船先の反つ

た底の平たい船。荷物の運搬や漁船として使用された)や、ひらた船(団平船よりなお小型の船底が平らで細長い船。小回りがきき、漁船として使われた)などが使用された。

江戸中期になると、北陸方面の物資を日本海から下関を廻り瀬戸内海を経由して大坂へと運航する西廻り航路が整う。そして北前船が運航されるようになると、びわ湖を通る物資の量はかなり減ってしまう。さらに、明治十五年の北陸線開通によって、びわ湖の舟運は日本の大きな輸送経路からはずされてしまうことになる。

(江戸時代の湖北の舟運については、「みく」な36号「湖北史話「びわ湖の舟運」」に詳しいので参考にされたし)。



びわ湖のおもな港

# 丸子船が行く

## 現役丸子船の船頭 山岡佐々男さん (湖北町尾上)



### 働き続けて五十年の 「金龍丸」

尾上港はびわ湖でも有数の大きな漁港だが、土曜、日曜ともなると、主に中京方面の釣り人で港が占拠されてしまう。漁業関係者専用のはずの駐車場には県外ナンバーのクルマがあふれ、釣り人たちは、突堤はおろか湾内に係留された強化プラスチック(FRP)製の漁船に乗り込まんばかりにひしめいてい

る。

そんな港の一角に異色の船を見つけた。黒っぽくてどっしりとした木造の船体、古いけれど得体の知れない迫力があるのか、釣り人たちもこの船にはあまり近づかないようだ。

これが、びわ湖で航行する最後の丸子船「金龍丸」である。全長十七メートル、幅二、五メートル。周りの漁船に比べて一回り大きい。荷物を積み甲板などに長年の傷みも少なくないが、まだまだ現役でがんばっている。舵が大きくて、形も特徴的なので、すぐに「その船」とわかった。

積み込めるのは最大で十五トン、米俵なら二五〇俵まで大丈夫、とのこと。大型のトラックに負けないが、こんなにたくさん荷が運べるのは、そもそも運搬船として造られたからで、重い荷を積んだほうが船も安定するそうである。

「昔風に言うたら百石積みいうてな。明けても暮れても、この船に燃料用の割木を積んで、近江八幡の瓦工場や大津へ売りにいったもん

や」と話してくれたのは、金龍丸の船頭、山岡佐々男さん(82才)。

昭和二十三年に堅田の造船所で進水したこの船は、二十五年ごろになって山岡さんが譲り受けたもので、ずいぶん旧式なディーゼルエンジンが、年月から威厳をもらったように鎮座している。

近年はウミ(湖)に出ない日も多くなったが、山岡さんは毎朝この船の点検を欠かさない。ごはんを食べると同じで「日課のようなもの」になっている。

### 浮世絵のような帆掛け船団

丸子船、短く丸子と呼ぶ人もいる。昔はびわ湖のいたるところで見られた船だが、浜で暮らすお年寄りも、遠い記憶の片すみに少しばかり残っているほどになってしまった。マルコと聞いたら、今の若い世代は人気漫画「チビまる子ちゃん」を連想するに違いない。丸子船はびわ湖独特の木造の和船で、舷に丸

太を二つ割りにしたものを側板として取りつけた形から名づけられた、と言われている。

江戸時代に最も栄え、北国・敦賀からの米や海産物を、京都へ運ぶ湖上物流の主役だった。一九九三年(元禄六年)には、びわ湖の二〇三方所の港に二二六隻の丸子船が帆を張っていた、との記録がある。

江戸時代の後期には、北陸から山陰沖、下関経由で、瀬戸内海を通じて大阪へ至る航路が開かれ、びわ湖の水運はその勢いを失い始めた。明治以降も鉄道輸送など陸上交通の発展に押されて減り続けたが、山岡さんが船仕事を始めた一九三〇年代には、まだ五十隻以上の丸子船が湖北の港に残っていたとのこと。

昭和の初期に、動力つまりディーゼルエンジンが導入されるまでは、丸子船も帆と櫂で動いていた。帆を一直線に張った丸子船の船団は、「浮世絵の世界やった」そうだ。山岡さんの幼少のころの思い出は尽きない。

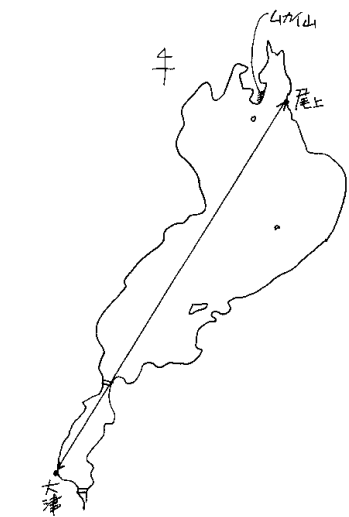
### 「長浜へもよう荷を運んだ」

長浜から来ましたと切り出したら、「あんたは、慶雲館の奥の方に港があつたのを知るとるかいのう。長浜にはなんべんも薪を運んだりしたもんや。マルサンへ船を着けてな」と、山岡さんは話し始めた。

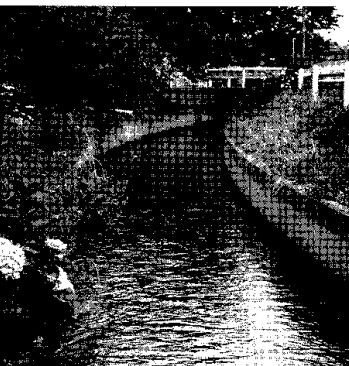
旧長浜港が埋め立てられたのは昭和三十年代半ばのこと。マルサンとは九三、公園町の丸三燃料さん(廃業)のことだが、あの場所まで堀(水路)が続いていたわけである。

「長浜へは石もよう運んだ……」と、山岡さんの話はどんどん続いていく。豪邸を飾る庭石も、力持ちの丸子船に運ばれてきたのだった。尾上の山岡さんにとって、長浜は割り木などの一番近い消費地、販売先、つまり得意先でもあったのだ。

長浜港と駅(ステーション)が直結していた時代のことを、山岡さんは本の中でこう語っている。少し長いがそのまま引用しよう。



▲尾上と大津は、びわ湖大橋のかかっているびわ湖のくびれた部分を通って、一直線に結ばれるので、大津港から尾上港が見えたという



▲尾上集落を流れる余呉川。かつて河口が5200mほどまで船が入っていた

## 共感 共生 下座

ビューティソシアル  
たちばな  
15-1.Miyama-cho.  
Nagahama-city  
TEL:0574-63-4261  
FAX:0574-63-8788

プライム・ザ  
たちばな  
9-1.Yawatahigashi-cho.  
Nagahama-city  
PHONE:0749-63-7225

クレールバーン  
たちばな  
Yawatansukayama-cho.  
Nagahama-city  
PHONE:0749-65-3886